編集後記

本号では、五本の原稿を投稿していただくことができました。『大分県地方史』では各号の編集担当者が原稿集めに苦労している状況を仄聞しておりましたので、御多忙の中、本号に投稿していただいた皆様には感謝に堪えません。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

『大分県地方史』のこれまでのバックナンバーを拝見しておりますと、全国的にも著名な大友氏に関する諸論考をはじめとして、大分県の歴史研究を発信する場として、貴重な学術雑誌であると思いますので、これからも積極的な御投稿を期待しております。

大友氏と言えば、フロイスの『日本史』が著名ですが、フロイスの『日本史』を読むとわかるように、フロイスは大変な名文家であり、『日本史』は戦国時代の状況を雄弁に物語っているため、現在でも多く引用されます。しかし、雄弁に当時の状況を活写するということと、歴史の真実を正確に伝える、ということとはやはり別問題であろうと思います。

例えば、豊薩戦争の際に、豊後岡城に三、四万の人数が立てこもった、という記事が出てきますが（『フロイス日本史』八、豊後編Ⅲ、中央公論社、一九七八年、一七二頁）、これなどは非常に疑わしい数字であると、私は考えています。といいますのも、戦国時代の岡城は現在見ることのできる江戸時代に整備された岡城よりも規模的にははるかに小さかったわけで、そのようなエリアに三、四万の人数が立てこもる、ということ自体が想定し難いのであります。単純に考えて、三、四万という人数は、現在のドーム球場のキャパが満杯になる数であり、このことを勘案しても人数の誇張（フロイスが人数を実際にカウントしたわけではなく、風評の数字を誇張した可能性）という印象を強く受けるのであります。

こうした誇張がなぜ記されたのか、ということを考えてみると、フロイスという人物は極めて攻撃的なイエズス会の宣教師であって、沈着冷静な歴史家ではなかった、という点に尽きるでしょう。そのため、『日本史』ではキリシタン大名のことは過剰なほど褒めちぎる一方で、異教徒については過激なまでに辛辣で罵詈雑言を浴びせるような表現がされているのです。例えば、朝鮮出兵時の秀吉については、戦争指導を放棄した愚かな天下人というような表現がされていますが、日本側の史料（秀吉朱印状など）を検討すると、そうしたフロイスの評価は意図的にバイアスがかかった見方であったことは明らかです。

史料の読み方一つとっても、このような史料批判（この場合は、フロイスが『日本史』に巧妙に書き込んだウソに対する史料批判）が必要であることを自戒をこめて注意する必要があるようです。こうした感想も含めて本号の編集後記とさせていただきます。

（白峰　旬）

平成十八（二〇〇六）年三月二五日　印刷
平成十八（二〇〇六）年三月三〇日　発行

大分県地方史　第一九七号

編集者　白峰　旬
発行者　豊田寛三
印刷者　廣永晴巳
印刷所　有限会社舞鶴孔版
〒八七〇－〇〇二二
大分市大手町二丁目三－四
（☎〇九七－五三二－四二三二）

発行所
〒八七〇－一一二四
大分市旦ノ原七〇〇
大分大学教育福祉科学部国史研究室内
大分県地方史研究会
（振替・〇一五八〇－二－五二九四）

事務局　大分県立先哲史料館
〒八七〇－〇八一四
大分市大字駄原五八七－一
（☎〇九七－五四六－九三八〇）